

第23回日本水大賞 応募用紙

(整理番号：)

活動の名称	ゲッカンシニヨルココロヒカレルミズベクウカンソウゾウノココロミ 月刊誌による心ひかれる水辺空間創造の試み									
記入年月日	活動主体					活動分野				
年 月 日	該当する活動主体に○ (1つまで)					主な活動分野に◎ (1つまで) その他関連する活動分野に○				
	学校 ()	企業 ()	団体 ()	個人 (○)	行政 ()	水防災 ()	水資源 ()	水環境 (◎)	水文化 (○)	復興 ()
活動主体の概要										
活動主体 の名称 (個人応募の 場合は個人名)	ナカムラコウイチ 中村孝一									
代表者名 (団体の場合)	フリガナ				設立年月日					
所在地	トヤマケントヤマシ 富山県 都・道 富山市 市・区 区・町 村 府・県									
主な活動地	富山市 松川・いたち川									
組織の概要 (個人の場合は 履歴を記入)	1944年富山市生まれ。1977年「月刊グッドラックとやま」創刊、発行人。1987年「富山観光遊覧船(株)」設立、代表取締役に就任。1997年 米国サンアントニオ・リバーウォーク視察、「松川を美しくする会」発足、会長に就任。2003年 神通川直線化100周年記念「川と街づくり国際フォーラム」開催、事務局長に就任。2004年 富山市合流式下水道改善計画アドバイザー会議委員、2007年「松川・いたち川整備懇話会」委員。2017年「水の都とやま」推進協議会」設立、理事長に就任。									
応募活動の概要：(文字サイズ10.5pt～、300文字以内で記入して下さい) 1975年、富山市中心部の松川をコンクリートで蓋をして駐車場化する無謀な計画が発表され、大論争が巻き起こる。都市問題では、水辺環境保全が大きなテーマになっていた。“川はそこに住む人の心を映し出す”と気づき、水と関わる住民生活の意識を“内面から豊かにする”発想が必要との思いから、出版、中でも月刊誌が有効と、1977年に「月刊グッドラック」を創刊。そして、住民に水辺環境の実態を絶えず観察してもらうため、遊覧船の運航に取り組む。水辺が美しくなると、水辺を見つめる意識を持った人が増えて市民の誇りも高まり、それにふさわしく周辺も整備。そこに観光客が集まるようになり、観光都市としても成長することとなった。										
応募活動のアピールポイント：(文字サイズ10.5pt～、箇条書き100文字以内で記入して下さい) 水辺環境を良くするには、人々の内面を豊かにする発想が必要と考え、心を豊かにしてくれる月刊誌を創刊。また市民が水辺に親しみ、観察できるよう遊覧船を運航。水環境のさらなる向上に挑戦したい。										
これまでの受賞歴：第5回「NTTタウン誌大賞奨励賞」受賞(1989年)、「Good Working賞」受賞(富山商工会議所)(2004年)富山市表彰(産業経済功労)(2013年)、(公社)とやま観光推進機構「観光事業振興功労者表彰」(2020年) ※日本水大賞における これまでの応募実績：第()回、受賞歴：第()回()賞										
「日本水大賞」をどこで知りましたか？(数字に○印を付けて下さい) 1. 新聞広告 2. 官庁内ポスター 3. 日本河川協会ホームページ 4. 水大賞事務局からの案内 5. 国の機関からの誘い 6. 県・市町村からの誘い 7. 教育関係機関 8. 日本河川協会ホームページ以外のインターネットの情報 9. その他()										

(整理番号：)

活動の概要

目的：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）

都市は水の恵を受けて川のほとりに生まれ、肥大すると共に、その汚物で母なる川を滅ぼしてきた。1970年代初め、県都富山市の中心部を流れる松川もドブ臭に覆われ、死に瀕していた。“川は都市を映す鏡であり、そこに住む人々の心をも映し出す”と気づき、水環境の改善には精神面を豊かにする月刊誌が必要との思いから「月刊グッドラック」を創刊。1977年のことである。そして、座談会を開くと「友だちが遊びに来てでも連れて行くところがない！」と市民からの悲痛な叫び。本来、松川を中心に風光豊かな水辺の街であるべきなのに、魚も住めないほど汚れていた。松川は富山城址、県庁、市庁舎など公共空間を流れているので、管理する県に「水辺環境を美しくしましょう」と要望すると、「治水以外は予算は取れない！」とはねつけられてしまった。その時、頭に浮かんだのは、観光地はどこもキレイではないか、と。とすれば、“観光”の力で水辺を美しく、潤いのある風景に変えることができるのではないか。江戸から明治にかけ、松川が神通川だった時代、富山港から富山城への舟運が発達し、沢山の帆船が行き交い賑わっていた、その歴史と文化を生かし、遊覧船が行き交えば、本来の美しい水辺環境を蘇らせることができるのではなかろうか。ところが、この計画を県に相談すると、「遊覧船など前例がない！」と猛反対される。それでもあきらめず関係部署に集まってもらい、説明会を開催したところ、「たしかにこれまで洪水対策だけの川になっていた。おっしゃる通り、これからは水辺環境を美しく整備して、遊覧船が行き交う“水の都とやま”のシンボルとなるよう、県、市を挙げて協力しましょう」との前向きな発言を引き出すことに成功。「月刊グッドラック」創刊から10年、ついに行政を動かすことができた。この出来事は、1997年の河川法改正により、これまでの「治水」「利水」にプラスして、「環境」という新しい柱が加わる10年前のことだった。

1987年、国、県、市、経済界の支援のもと、「富山観光遊覧船（株）」を設立。出版事業にプラスして観光事業による、水環境の改善がはかれるか、その挑戦が始まった。

内容：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）

「月刊グッドラック」では、住民主体で水環境を考えてもらおうと、毎月、座談会を企画。創刊100号記念特集のテーマは、「水と緑が一体となったうおいのある街に」。市民からは「1枚の絵ハガキにもなる水辺の街を！」との熱心な意見が続出。川の中から松川の水辺環境を観察できる遊覧船の登場は、市民の想像力に火をつけることになった。

1989年、富山県知事が、“アメリカのベニス”を目指して成功したサンアントニオ市を視察、月刊グッドラックのインタビューに答えた。「町の中心部には松川と同じような川が流れ、川辺りにはレストラン、ホテル、コンベンション施設が集まり、賑わっていた。“川の王国”富山県のリバーフロントを考える上で、学ぶことが多い」と意欲を語った。一方、1987年に始まった遊覧船の運航が一時的なイベントで終わることのないよう、富山城址公園内の松川に面して、駅舎の建設を市に要請していたが、申請から5年経ってようやく許可されることになった。駅舎には飲食施設や観光案内所も併設し、1992年に完成。松川茶屋と命名され、店内からは松川や遊覧船が行き交う様子が手に取るように見えるようになった。

1997年、サンアントニオを自分の目で確認するため、現地取材を試みることに。何よりも驚いたのは、川の中にもリバーウォークにもゴミが見当たらなかったこと。歴史を調べると、洪水対策から松川と同じようにバイパスを作って湾曲部を残したこと、コンクリートでフタをされそうになったことなどを知って親しみを感じた。これは市民の皆さんにも知ってもらわねばと、2003年、神通川直線化100周年を記念して、現地から河川局長を講師に招き、「川と街づくり国際フォーラム」を開催。国土交通省などの後援もあり、全国から水辺環境に関心のある方が大勢集まった。この時、松川では「リバーフェスティバル」を開催。2000年に県にお願いして護岸を垂直に切って造っていただいたリバー劇場でのショーや、遊覧船によるリバーパレードは、水辺の新しい活用策として話題になった。

さて、松川に流されるゴミや川底のヘドロは、市民や船頭、行政の努力によって、みるみる改善されていったが、最大の課題は合流式下水道の改善である。雨が降るたびに下水が入り、近づくとも臭いので、遊覧船の乗客からも不評を買った。管理する市の上下水道局に相談すると、5人委員会を立ち上げるので委員として参加し、提言してほしいと要請される。そこで地下に貯留槽を設け、雨水と汚水を分け、汚水は浄化場へ流れていくようにして、松川には1滴も入らないよう提案。初めは、「巨大な予算を必要とする事業は地方都市では不可能！」と笑っていた担当者も、松川遊覧船の乗客が国内だけでなく、世界中からやってくるようになると態度が一変し、委員会設置から7年、2012年、ついに地下貯留槽の建設に着手、6年かけて2018年に完成した。

100年に一度の歴史的偉業ともいえる「松川雨水貯留施設」の完成は、“環境未来都市”に選定された富山市の本気度を示すものとなった。

さらに2017年、「月刊グッドラック」創刊40周年を記念し、富山市の松川を核に“魅力ある水辺の街”を目指す「水の都とやま推進協議会」を設立。会員が一丸となって、水辺の環境整備や賑わいづくりに取り組むことを誓った。“水の都とやま”の魅力発信に向け、43年間の実績をもとに今、新たな挑戦が始まる。月刊誌による“心ひかれる、水辺空間の創造”に向かって。

活動期間 自 1977年 11月 ～ 至 2020年 10月（通算 43年 ヶ月）

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入して下さい。

活動の必要性・緊急性： 45年前、県都・富山市を流れる松川は、ヘドロやゴミがたまり、水環境が著しく悪化したため、コンクリートでフタをして駐車場にされそうになった。富山市は神通川だった松川から誕生しており、市民にとっては心のふるさととも言える大切な川。なぜこのような無謀な計画が企てられたのか、立案した代表に聞くと「臭い物にはフタをしろ！の発想でした」と。なぜ松川を美しくしよう、という発想がなかったのか。不思議に思い、管理者である県に相談すると、「治水以外は予算が取れない」と。そこで、松川がなぜこんなに汚れるのか、原因を調べてみると、なんと心ない市民のゴミ捨て場になっていること。また、合流下水道のため、雨が降るたびに下水が入って、ヘドロ化して悪臭を放っていることがわかった。そのため、市民が松川に近づかなくなり、川が存在まで否定されていた。「このままでは松川がなくなる、松川がなくなれば市民のアイデンティティも失われる」、との危機感から、まず市民に早急に松川の水辺環境に注目してもらうことが必要であり、そのためには観光の力が必要と考え、遊覧船の運航に踏み切ることになった。

活動の効果・社会への波及効果： 1977年、“心の豊かさ”を求める編集方針のもと、『月刊グッドラック』を創刊。市民参加の座談会で、「心ひかれる水辺空間が、生物の生息の場として、あるいはアメニティの場として、かけがえのない価値を持っている」ことを訴えてきた。そして、1987年には松川に遊覧船を運航することで、「水辺は生かし方次第では絵になる、大変魅力的な場所になる」と、市民意識を高めることができた。この2年後、富山県知事がアメリカ・サンアントニオ市を視察、松川の可能性を探ることに発展した。こうして、市民意識がさらに高まり、松川の可能性を探るため、2003年、国土交通省、富山県、富山市、（公財）河川財団、（公社）日本河川協会、（公財）リバーフロント整備センター等の後援を得て、2003年「川と街づくり国際フォーラム」を開催。そして、県議、市議、元行政マン総勢19名でサンアントニオを視察。松川の水辺環境のお手本を見せられた参加者の熱い支援もあり、長年の課題であった松川茶屋と松川の間の護岸を生かして、2005年、日本で初の階段式カフェテラスが完成した。全国から水辺環境を生かした街づくりの参考にしたいと、“水の都とやま”への視察が増えている。

活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦労された点： どぶ川と化した松川は異臭を放ち、ゴミ捨て場となっている。この状態が異常であることを、市民に気づいてもらわねばならない。そのために月刊誌が果たす役割ははかりしれない。座談会に出席した市民も、「どんな良い言葉も言った後、すぐ消え去るけれど、活字は残る」と。水辺空間が人間にもたらす安らぎの大切さを語るだけでなく、しっかりと誌面に残すことで出席者の自覚も高まり、読む人の意識も高まる。しかも、毎月特集を組むことで、水辺環境の質の向上と、必要性を繰り返し、繰り返し訴えることができる。月刊誌の継続性は、読者に信念をもたらすことにつながった。1977年創刊以来43年間、11月号で516号を迎える、「月刊グッドラック」の編集方針は、「われわれに心の糧を与え、われわれを勇気づける記事を取り上げ、高い理想と、希望と、向上心を絶えず持ち続けるよう、読者を激励する」というもの。月刊誌の発行を通じ、“水辺を美しくしたい”、その想いを持った仲間、支援者が増え、世代を超えた友情が芽生えたことは、この活動から得た貴重な贈り物となった。

活動の今後の計画： 水環境の健全化に必要なのは、未来への展望であり、希望を決して失わない信念である。しかもソフト面、ハード面を分けて考えると、活動に参加する人も自分の役割がわかりやすい。ソフト面ではリバー劇場でのリバーフェスタや、遊覧船を使ったランチやディナークルーズなど、さまざまな楽しいイベントで、松川の楽しさ、賑わいを高めたい。

ハード面では「水の都とやま推進協議会」で話し合った内容を行政に提言し、できる所から実現して行く予定である。富山は昭和20年8月の大空襲で、市内中心部の99.7%を焼失。文化財や歴史的建造物を失ったので、この復元を松川河畔でできないか検討中である。旧富山市立図書館などは、東京駅を設計した辰野金吾の設計であり、旧富山市役所も復元できれば、松川河畔に建つ現庁舎との比較もでき、市民に自分たちの街が歴史も文化もある街として、誇りを持ってもらえるのでは、と計画中である。“神通川の歴史と水辺を活かした美しいまち”を創るため、官民協働でこのプロジェクトに挑戦し続けたい。

応募推薦者（必要な場合にご記入下さい）

氏 名	渡邊明次	推薦の言葉： 中村氏の活動は長年に渡り、ごみや下水が注ぎ込む松川の浄化に取り組み、今では大勢の来客が訪れる都市のアメニティーに生まれ変わらせた実績は大きい。
所 属	関東学院大学名誉教授	
氏 名	池田武邦	推薦の言葉：富山が“水の都”と言われ、素晴らしい街になっているのは「月刊グッドラック」のおかげ。中村氏の初心貫徹は本当に素晴らしく、ぜひ1,000号を目標にやっていただけると、富山の水辺はもっと良くなると思います。
所 属	（株）日本設計名誉会長	